

民具が語る

砺波のくらし

— 6900 点が国の文化財に —

無料入館

国の重要有形民俗文化財に

指定されました。



このたび、

平成29年 **10月13日(金)~11月26日(日)**

▶休館/毎週月曜日 第3日曜日

▶開館時間/午前9時~午後5時

会場: 砺波郷土資料館

TEL:0763-32-2339 FAX:0763-32-2436
〒939-1382 砺波市花園町1-78 砺波チューリップ公園内
Email:shiryokan@city.tonami.lg.jp
主催:砺波郷土資料館/共催:砺波市文化協会

国指定 重要有形民俗文化財 「^{と な み} 砺波の生活・^{せい かつ} 生産用具」 平成29年3月3日指定

江戸・明治時代から昭和30年代頃まで、人びとが生活の必要から製作し、使われてきた道具、民具。大量生産される以前のモノには、その地方ごとの暮らしや^{いとな} 営み、その時代ごとの使い手の跡が^{きざ} 刻まれます。また、自然環境や使用条件などにより、地域独特の発達を見ることもできます。

50年程前より砺波の各地域から集められた民具の中で、特に砺波地方の人々の暮らしのようすがあらわれている民具6900点が、今年の3月に「^{と な み} 砺波の生活・^{せい かつ} 生産用具」として国の重要有形民俗文化財に指定されました。

生活用具

〔砺波地方の日常生活の道具〕

身に着けるものに関する用具

和服、洋服、寝具、雨具・^{みの} 蓑、履物、化粧・結髪、裁縫、洗濯



食べ物に関する用具

炊事・調理(鍋・釜)、飲食(御膳・^{しこう} 椀)
保存・醸造(桶・米びつ)、嗜好(酒樽・^{しこう} 煙草)



住まい、家に関する用具 ・ 散村社会での生活に関する用具

照明(ちょうちん・ランプ)、暖房(いろり・火鉢)
家具・設備(たんす・机・電話機)
防護(トビグチ・雪囲い・バンバ)
村のくらし(拍子木・村の太鼓)
個人の生活(神棚・仏壇用具)



冬場にまとめて作るワラ製品の製作道具

^{わら} 藁仕事(俵編機・^{たわらあみき} ツツノコ・^{せい えん き} 製筵機)



地域で受け継がれている伝統行事や風習

信仰用具(夜高・獅子舞)、年中行事(天神様)
人生儀礼(嫁入り・^{さんい} 産育)



ぶじ田植えが終わると夜高という子ども行事が行われます。夜にこの行燈を持って一軒一軒まわります。ろうそくの火で行燈を燃やしたり、あぜ道から落ちて泥だらけになったりと、泣き笑いの大行事です。今年の豊年万作を祈って子どもたちは懸命に歌います。(現在も継承されている行事)

なぜ、今、民具が文化財になったのでしょうか

旧家の納屋や蔵には、昔使っていた農具や、法事や祝い事の際に使われた漆器、おばあちゃんが嫁入りの際に持ってきたタンスや着物などが今でも大事に保管されていると思います。

さて、最後に使ったのはいつだったのでしょうか。

砺波の風土の中で先人たちがつないできた「砺波のくらし」には砺波らしさが凝縮されています。しかし昭和30～40年代の高度成長期の大量生産、機械化、利便性の追及などの影響を受け、長く受け継がれてきた砺波らしさは薄れてしまいました。

その「砺波らしさ」を示すものとして砺波の民具があります。かつて砺波地方で使われ、今は有能な砺波の語り部となった民具は、後世へ「砺波らしさ」を伝える役割を受け、文化財として保護されました。

生産用具

〔^{せい ぎょう} 生業(仕事)の為に使われた道具〕

砺波平野で使用された稲作用具及び裏作のチューリップ栽培用具

稲作(クワ、スキ、エブリ、田植杵)
ニシン切り、中耕除草機
千歯扱き、足踏脱穀機
飼葉桶、らせん水車)



スキを馬の後ろに取り付けて田を耕します。馬の力を借りられるようになると、人はとても楽になりました。でも生き物なので、世話が大変です。機嫌よく耕してもらうために、おばあさんは朝2時に起きて「馬のもの」を煮たきします。夕方には馬だらいに足を入れて体じゅうお湯で洗います。よく働いてくれたので、5月末には涙、涙のお別れです。(昭和20年代まで)

チューリップ栽培用具

川や用水での魚捕獲に関する道具

とあみ 投網・^{ぶつたい} ブッタイ・ウケ
かわぶね 川舟の櫂



蚕を飼う用具(養蚕)

飼育用具(桑籠・^{くわがご} 蚕箔)
まぶしおりき 蔟折機・^{まぶし} 蔟



糸を紡いだり、布を織ることにする道具

織物の材料(カセ糸)、
つむ 糸紡ぎ・製糸用具(苧桶、糸繰車)、機織機



職人の道具

大工、屋根葺き、石屋、桶屋、鍛冶屋、下駄作り

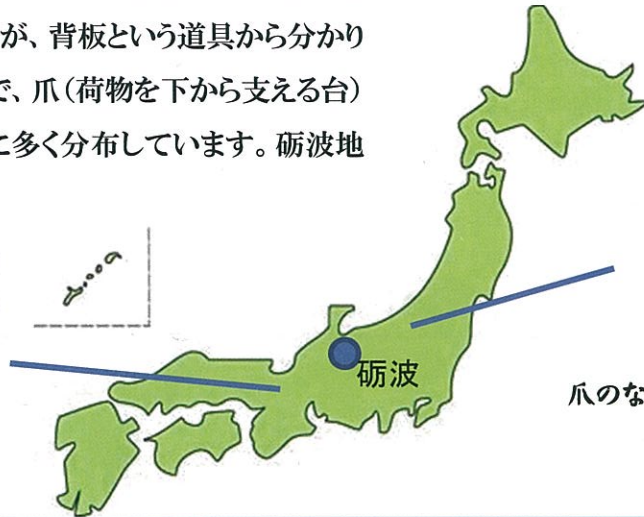


砺波らしさを伝える民具

せいた 背板

砺波地方は日本列島のちょうど中間あたりに位置していて、東日本と西日本の文化が混在しています。そのことが、背板という道具から分かります。背板とは、物を運ぶときに使う道具で、爪(荷物を下から支える台)のあるものは西日本、ないものは東日本に多く分布しています。砺波地方ではその両方が使われていました。

爪のあるもの
ゆうそうがた
(有爪型)

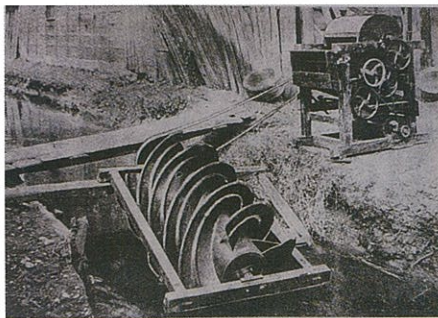


爪のないもの(無爪型)
むそうがた



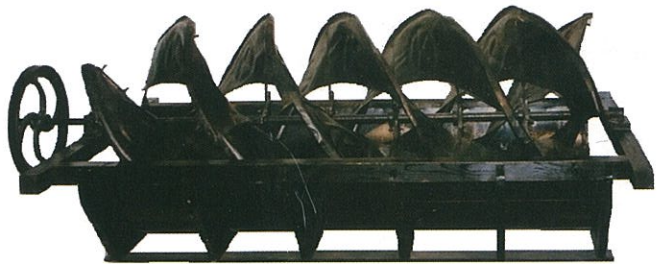
らせん水車

収集した農具の中には、砺波市の人々の発明品もあります。現砺波市秋元の元井豊蔵(1884-1951)が考案した「らせん水車」は、用水の水流を活用した原動機で、その動力はもみすりやだっくなどにも使用されました。豊富な水があり、無数の用水が走る砺波平野だからこそ誕生した民具であるといえるでしょう。



元井式らせん水車

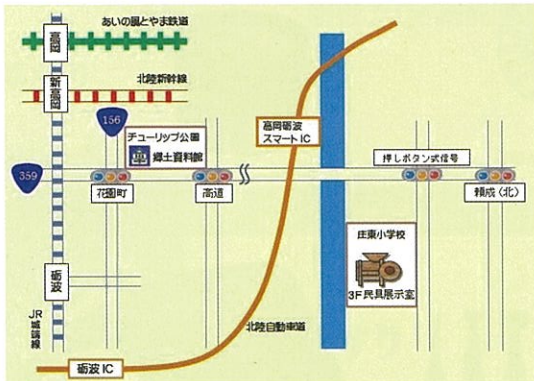
用水に入れ、ロープを使って農具に動力を伝える
(『富山県農業雑誌』300号、1923)



森河式らせん水車

木胴の元井式を改良した鉄心型のらせん水車

砺波の民具は、庄東小学校3F「砺波民具展示室」(砺波市頼成 566 番地)でもご覧いただけます。(常設)



発行: 砺波郷土資料館

〒939-1382 富山県砺波市花園町 1-78
TEL: 0763-32-2339
Email: shiryokan@city.tonami.lg.jp

表紙の写真は田邊朋宏氏(福井市埋蔵文化保護センター)撮影